

短歌

木村光子
小西久二郎
宮本照男
選

特選

初酒のしこみ終えたる蔵の土間
親子師匠の教えはひとつ

甘呂町 日和田 喜美子

(評)

ようやく初酒の仕込みを終えることができた蔵の土間、親子で仕事をしているのであるが師弟の関係にある。その辺の愛情が結句にあつて、簡潔な表現が余剰を把握している。

特選

はじまりは義父の盆栽だった松
今じゃ脚立で汗をかきおり

近江八幡市 浅野 忍

(評)

いま脚立に乗り、手入れをしている松は嘗ては小さな盆栽：それも義父から譲り受けた大切な一樹。上の句と下の句の間に大きな時間の流れを感じます。成長した松を通してその時間を楽しむ豊かな人生を感じる一首。

特選

ファンの夢かなえて賜杯持つ腕
青房の下さわかかな武者

東沼波町 石井浪 栄

(評)

大相撲史上、初の観客不在の場所。異常づくめの本場所ながら幕尻の青年力士の賜杯佩帯という快挙は歴史に刻まれるべき記録となつて閉幕。確かな成長を遂げた青年力士をよく描写、大相撲の歴史に刻まれるべき心延え、技量の印象が鮮やかな一首。

入選

冬野菜袋一杯詰め込みて
新築の背戸孫に食わせよと

東近江市 小林 清次郎

(評)

冬野菜というから大根、かぶら、白菜、水菜、人参もあるろう。それらを袋一杯詰め込んで、新築した家の背戸、裏口に孫に食わせてやりなど置いてきた。親の気持ちが表現は粗いがよく出ている。

入選

ウィルスに足止めされいるランドセル
ママの礼服今朝も床の間

東近江市 藤本 修

(評)

子ども親も「入学」のその日を鶴首する日々。「ウィルスの足止め」に家中一番の部屋に幾たび佇まれたことか。家族の鬱屈や横顔、心底の諸々が「ランドセル」や「礼服」に託された描写が鮮明な詩である。

入選

コロナウィルスあらざる畑に深呼吸
春日背に受け薯を植えおり

日夏町 寺村 享子

(評)

コロナウィルスのない畑へ来て深呼吸をし、草木のある新鮮な空気だろう。春のあたたかい陽ざしを背にうけて、馬鈴薯を植えている。畑へ来て仕事をするとときはコロナのことを忘れていいのか。

入選

きりもみの技を競ひて少女らは
並の顔してスケート靴脱ぐ

東近江市 坂口 靖子

(評)

難度の高いスケートを終えた少女が「普段の顔」に戻る一瞬。「道を極める」痛苦を垣間見た感動とまばゆさの一首。

入選

あの頃は幸福だったとビロードの
古きコートを解きつつ想う

中藪町 山川 美江

(評)

若い頃大切にしていたコートを前に沁み沁みとした想い出が
募ってきたのである。初句の明快な歌い出しと結句の間にあの
頃の込みあげる感情と時間の経過が伝わってくる。要点を押さえ
た簡潔な描写を佳とする。

入選

店先に川えび入荷と目に止まる
凍てつくような手浮かべつつ買ふ

古沢町 野洲 令子

(評)

店先に「川えび入荷」の札があって目に止まった。冬の最中だ
から凍るような冷たい手を浮かべながら買ったという。その思い
が伝わってくる。



佳作

推敲に歌のいくつも書きしるし
ととのふことなくノートを閉づる

西今町 久永 朝子

佳作

突然の春の嵐に喚声を
残し園児の列過ぎゆけり

芹橋二丁目 古池 陽彦

佳作

辛抱をしてるの私いやボクと
決着おいて夫は旅立つ

大藪町 大塚 しのぶ

佳作

言い違い聞き違いあり導火線
パチパチ火花これも愛だな

彦富町 池田 光雄

佳作

朝よりの冷たき雨に迷えるも
テレビの金目鯛われを鼓舞する

松原町 北川 満代

佳作 わくわくと身なりととのえじじばばも

孫の彼女が来るといふ朝

佐和町 大橋 くに江

佳作 里山に猪の足跡忙しない

筍探す季節これから

甲田町 平田 政江

佳作 手をつなぐことなど久しく無かりしに

夫を支えて段差を跨ぐ

開出今町 掛田 洋子

佳作 クラスタ、オーバーシユートやパンデミック

コロナの用語疎ましく聞く

高宮町 細田 恵貢子

佳作 苦も楽も餅にまるめて椀のなか

心新たに子年迎えぬ

正法寺町 高井 豊

佳作 痒い身をこすりつけしや石灯笼とうろうの

廻りにのこる熊の毛強こわし

長浜市 山田 静子

佳作 繰返し女孫まご吹くフルート二階より

奏でる音色に癒されており

日夏町 津野 幹子

佳作 帰省子に相槌打ちつつ夕支度

俎の音かろやかのなら

極楽寺町 古川 寛二

佳作 弥次郎兵衛のごとく危うき老い二人

開き過ぎたる薔薇が崩れる

外 町 筑田 豊子

佳作 頬張れば溢るる餡と蓬の香

鄙めく母の餅なつかしき

東近江市 平田 三栄子

佳作 夫とわれジグソーパズルの五十年

空椅子語るゲームの終を

日夏町 石原 不二子

佳作 朝なさな息子訪ひ来て「おはよう」と

鸚鵡のやうに交はし出て行く

古沢町 大橋 しず

佳作 片腹を雪の隠さぬ伊吹嶺は

知らぬ顔にてすまし座しけり

野瀬町 中山 敬一

佳作 陽の沈むびわの湖静かなり

病室の窓退院近し

下西川町 北川 和子

《総評》

「何をどのように詠むか」は洗練された言葉や意表を衝く語彙を連ねることではありません。芸術が創造である限り、それも大切な要素ではありますが、普遍性^{II}すべての場合にあってはまる可能性や必然性を欠いては文学として成立しないと自覚せねばなりません。

この立場から、今年度の作品の実態を見詰めると、言葉が自分のものとして使われていない、言わば未消化の作品が多いことに驚きます。作歌を志し、向上を目指す以上、自他ともに謙虚であれと銘記すべきを再確認いたしました。

身近には溢れんばかりの実作者、そして創造を促す豊かな環境に生きている私達です。

「恣意は文学の墮落」と初心の頃に教えられたことを思いつつ明日と言わず、再び、短歌の道に勤ましましょう。「わたくしの短歌こそ」の道を広げて下さることを心より希望する者です。

木村 光子

応募者が十三名も減ったのは残念である。作者が減るのは歌壇全体の風潮であり、どここの団体も結社も同じで、高齢化の問題もある。今後は期待できないように思われる。それはそれとして作品の質はどうかということが大切である。ひと言でいえば、大半が日常瑣末詠である。勿論同じような人が応募しているので、作品がよく似てくるのは当然である。

然し、今年はコロナの関係で家にこもることが多く、作る時間が充分あったわけである。こうした機会を生かして各自が前向きにとりくんでゆけば、三十首詠の準備などにありがたかっただろう。要はいかに努力するかによって、質的向上はあり得るのである。本年

の作品を見るかぎり、そうした努力の成果はみられなかった。脳の活性化は無限と言われている。つまり、使うほど良いと言われている所以でもある。こうした意味で来年度に期待したいものである。

小西久二郎

コロナ感染抑止のため緊急事態宣言は国民の大多数が在宅を余儀なくされました。多くの方が朝から晩まで家にいる時間が続いた。親しい家族や友人と会うことも街に買い物に行くのも憚られ、来る日も来る日もひたすら^{ひっそく}逼塞した。

そんな日常のなか朝な夕なに散歩をすると道ばたの草花のそれまで気づかなかった美しさに気がつくようになった。平凡で見慣れた拙い草花に、ハツとして心がときめくような感動を経験する。少々窮屈であった生活は新鮮な発見でもあった。明治の正岡子規は動きのとれない病床から庭をながめ子規の重視した「写生」という方法は生まれた。毎日の小さな変化こそオリジナルな素材の宝庫だというのである。子規が現代に生きていけば…。外出仮ならない今もこのころの持ち方一つで新たな発見が生まれるかもしれない。

無聊^{ぶりょう}の先にそんなことを考えてみた。

宮本照男

選者詠

六塵の衢に押らさるる身の零す
無用のやうなるわが影淡し

木村光子

畑へ来て野良猫からすに無視をされ
卒寿すぎしをよろこぶべきや

小西久二郎

輪郭を隠した古代湖つつみ込む
梅雨の気配の万斛の闇

宮本照男